

4 古典、現代建築歴訪の旅

4.5 スペイン、フランスの建築

私はかろうじてその事故をまぬがれた。狭いトンネルの中で車を止めるわけにもいかず、又、なおみが半分恐怖におののいた様で

あった事
もあった

ので、恐ろしくなって、その人達の事を気にしながら、その場を去るしかなかった。まもなくして遠くで救急車のサイレンの音が聞こえてきた。イタリアの国をぬけるまで、そんなトンネルを数え切れない程走った。

しかし、南フランスに入ると地中海の平地の海岸線が続く様になった。ニース、サンレモ、モナコ等の街は、新しい建築が多く、おだやかな美しい所であった。冬でも気候が良く、平和でのんびりした新しいリゾート地のようにあった。左側に地中海、右側にブドウ畑やオレンジの果樹園が続く高速道路を走り、コルビュジェのハウジングを見る為にマルセイユによった。ハビタシオンと呼ばれるそのハウジングは周囲住宅地区とはスケール感が異なり、打ちっ放しコンクリートの横に長く伸びた巨大な高層の建物であった。圧迫感すら感じた。

その後、地中海に沿ってスペイン、バルセロナに向かった。バルセロナでは、建築家ガウディが創った多くの奇妙な建築が私の印象に強く残った。サグラダファミリアの聖堂は、特に印象深かった。この聖堂は、70年以上も工事



いつ完成するかわからないサグラダファミリアの工事現場、ガウディ設計 1906年



2階建てユニットのハウジング、店や集会所もあり、ひとつのコミュニティを創った。コルビュジェ設計 1950年 マルセイユ



グエル公園、砕いたタイルを貼り付けた彫刻的建築群
ガウディ設計 1914年

をしているにもかかわらず、まだ半分も終わっていない。設計の難しさ故に工事が遅れているという事もあるだろうが、この国の国民性も遅れている原因になっているのではないだろうか。工事中の地下室は、アトリエと展示室になっていた。若い建築家

が石膏を削りながら、模型を作っていた。図面の上ではとても表せない形なのである。工事中のいくつかのタワーは見学者用にアクセス出来るようになっていた。そのタワーに昇る階段の石は、もうすでに擦り切れた様にへこんでいた。

何人の人が訪れたのか、いつ完成するか分からない

この工事、私が生きているうちに、この完成したこの聖堂を見る事が出来るだろうかと思った。それにしても、ガウディが創る沢山の奇妙な建築を受け入れてくれるクライアントがいる国スペインとは、なんと素晴らしい国なんだろう。私は、インターナショナルスタイルと呼ばれる“機能は美なり”と言われた機能主義や、単純な機可学的な線を強調したデザインを学んできた。奇妙な形をしたガウディの建築は、私を刺激し、混乱させた。私は頭の中で、ガウディと格闘し始めた。スペインはスケジュールの関係でバレンシアまでしか行けなかった。そこで見た真っ赤の色に塗った複雑な形をした4～5階建てのコートヤードの新しい集合住宅を見た。比較的大きく、50世帯位入っていたと思う。狭いコートヤードの方に行くと赤が、濃いピンク色、赤紫に変わった。美しい地中海の丘に建つ、この赤い彫刻的な建物に住む人達は、どんな気持ちで住んでいるのだろうかと思った。トーラデ・アーキテクトというスペインの建築家が設計したのである。又、近くの街に立てられた彼らが設計し複雑な形で6～7階建て集合住宅は濃いブルーで全体が塗られてあ



昔のままで保存されているカルカソヌは、タイムマシーンに乗って何世紀も逆戻りをした世界であった。

った。何故、こんなに強烈な色にしなければいけないか、考えさせられた。頭を横に振りながら、再びフランスに戻り、古城カルカソヌの街へ行った。石とレンガの城壁で囲まれ中世の町はそのままだに保存されて残っていた。この数日の間に見た奇妙なガウ



真っ赤なハウジングが青い地中海の海と空に映えている。集合住宅がまったく彫刻として表現された建物、トウラデ。アーキテクト設計 1973年



リヨンの郊外に建つ修道院、コルビジェ設計
ラ・トゥーレット修道院(1953-58年)

ロンシャンの教会 ル・コルビュジェ設計、
1952年、コンクリートの特性を生かして
デザインされた自由な形と空間を創造した。

ロンシャンの教会の南側のぶ厚い壁をランダ
ムに割り貫いた窓から入ってくる自然の光。



ディの建物群、強烈な色、赤や青の建築そしてこの中世の城の街を私の頭の中でどのよう
に整理したらよいか戸惑った。

フランスの国に戻ってきてからは、現代建築の巨匠と言われた、ル・コルビュジェの作品
を集中的に視察することになっていた。リチャード・マイヤーにも言われたように、出来る限
り、数多くのル・コルビュジェの作品を見ることに計画をたてていた。リヨンの郊外に建て
られた修道院は固いごつごつしたコンクリートで作られた宗教の修行の場を意図したのか、
冷たい感じのする建築であった。いろいろな形をしたトップライトのあるコートヤードを
見ることが出来たが修道院の中には入れてもらえなかった。

彼の代表作のロンシャンの教会は、フランスの田舎にあった。ブドウ畑が続く田舎道を
ドライブしていくと、突然、濃い霧が出てきた。ほとんど先が見えなくなり、幻想的な世
界に入っていく感じになった。長いこと曲がりくねったゆっくりとドライブしていくと、
霧が少しずつ晴れてきた。丘の上に、写真で何度も何度も見たことのある、あのロンシャ
ンの教会が見えてきた。有名な建築なのに、教会には誰もいなかった。自由に、教会の中
に入ることが出来た。分厚い壁に機可学的に切り込まれた大小の窓、窓から入ってくる光

には、やわらかな感じはなく、
ところどころにあるカラフルな
ステンドグラスを通しての光は
何か厳しさを感じた。曲線の屋
根はやわらかさを出そうとして
いるのだろう。荒々しいコンク
リートの仕上げの壁は空間構成
が力強さを表現しているかの様
であった。あの修道院とはまっ
たく異なった表現である。

霧の中から現れたフランスルネッサンスのシャトー、ブライアンド城





ラ・ロッシュ邸、コルビュジェ設計、1923年。今はコルビュジェファンデーションのオフィスになっている。

最終目的地パリに行く前に、パリの南方に、ローイレ川が東西に流れており、その川に沿って、あるいは、川をまたぐ様にして、ルネッサンス時代のお城が沢山建てられ、保存されていた。それらを訊ねながら、パリに向かうことにした。雨が多いのか急勾配の屋根やトンガリ帽子の様な屋根のタワーが沢山ついているお城がほとんどであった。イタリアで見た赤茶色のゆるやかな勾配の屋根に比べて、対照的で黒っぽい色のスレート石の急勾配の屋根がほとんどであった。又、内装と同様に華やかさを象徴するかの



工事中のポンピドーセンター、ピアノ・ロジャー設計、1976年

様に、きれいに刈り込まれた唐草模様のフレンチガーデンも綺麗であった。訪れた日は、霧かモヤが深く、ぼんやりとお城が見えて、何か中世の世界の中に入っていく感じであった。こんなお城を訪れるのは、車では似合わない、馬車がいいかと思った。

パリに戻ってから、ル・コルビュジェのファンデーションの事務所となっているラ・ロッシュの住宅から視察を始めた。パリは芸術の都といわれる様に、古い良い建物が町並みをつくっている。ミュージアム、教会、タワー、大学のキャンパス、2週間程パリに留まったが、とても十分に建築を見られたとは思われない。ポンピドーセンターがほぼ完成に近づいていた。ラッキーには、その工事現場を見せてもらうことが出来た。こんな機械みたいな建築を、こんなに古い街並みの中につくってしまったいいのかなと思った。これが新しいフランスの文化である。以前にエッフェル塔を建てた時パリの人たちが反対したのと同じ感触なのかもしれないと思った。



救世軍のアパート、コルビュジェ設計1930年。この外装は1958年に設計しなおされたもの。

サボイエ邸、コルビュジェ設計、1923年、リチャードマイヤーと議論した建築である。リビングルームとテラスの関係が大変良かった。



シュタイン邸、コルビュジェ設計1929年、
落葉樹の葉が落ちて建物がよく見ることが出来た。
この裏側の外観の方が表の外観よりきれいだった。

ル・コルビュジェが設計したパリにある住宅をすべて見てまわった。丹下健三やリチャード・マイヤーが、こよなく愛した作品である。サボイエ邸はパリの郊外にあった。週末に過ごす、又、社交用の為につくられた家であるから、

当時としては斬新なデザインの軽々しい住宅でもクライアントは建てたのであろう。リチャード・マイヤーと議論した住宅である。家の中、外を自由に見学をすることが出来た。その時も見学者も管理者もいなかった。何時間も建物の中、外を歩きまわった。私はこのブルーのタイルでつくられたラウンジチェアの様な、何か古代を思わせるバスルームが気に入った。屋根の上に敷いてあった玉石をひとつ頂いた。これを、ル・コルビュジェのスピリットにしようと思い、生涯持っている事にした。ル・コルビュジェの設計した住宅は、40年も50年も前に設計されたものであるが、少しの古さを感じさせない。実に新鮮な感じがした。これは、現代のデザインが進歩していないということだろうか？建物の周囲には、木々は大きく育ち、建物を隠す様になっていたが、ほとんどの木が落葉樹であったので、葉は落ちていて、建物をよく見ることが出来た。これが、せめてもの冬の旅行の特権であろう。しかし、冬の日も短く、私がスケジュールをたてて見ようとする建物を、全部見るには、日の出る前に起き、見ようとする建物の前に車を止め、フランスパンをかじりながら太陽が昇るのを待った事が何度もあった。私は、この旅行でル・コルビュジェが設計した建物を合計23件も見ただことになる。

私のグランドツアーも終わりに近づいた。13の国々の中を約21,000km走りぬけ、ドーバー海峡のカーフェリー、北欧の海のカーフェリーを4回乗り換え往復した。自動車と一緒に汽車に乗り、アルプスの山も越えた。古代の建築から、中世の建築、そして、現代の建築と、いろいろの物を見る事が出来た。私は、自分で計画したほとんどすべての街や、建築を視察することが出来、いろいろな経験が出来た。しかし、はたしてこれでよかったのだろうか。人生の修業としての旅行にしては、かなり無理をした旅であったと思う。パリの街角で見かけた画家の様に、建築のスケッチを描きながら、のんびり旅が出来ればいいな、とも思った。それにしても、複雑な、緻密なスケジュールをたてて、大きな問題も起きずに、ほとんどスケジュールどおりにこれた事を、我ながらため息のつく思いであった。そして、それに協力してくれたなおみには本当に頭の下がる思いであった。

パリを後にして、モスクワ経由の飛行機で、久しぶりに日本に帰った。1976年も暮れようとしていた。イェール大学の大学院を卒業した年という以上にこのヨーロッパの旅、グランドツアーの完走で私には忘れられない年となった。

